

## 第六章 地名解

### 第一節 シコツと千歳

千歳の旧名「シコツ」は、アイヌ地名である。徳川幕府が蝦夷地を直轄した際、初代箱館奉行として派遣された羽太正養はたとまのやすが、文化二（一八〇五）年、シコツ川の「シコツ」は音の響きが悪いこと、また、当地が鶴の生息地であることから「鶴は千年」の中国の故事にちなみ、シコツ川を「千歳川」に改名した。現在の和語「千歳」の呼び名の誕生である。本節では、第一項 改名以前のシコツ、第二項 シコツ川を千歳に改名、その中で釜加神社の厨子を紹介し、ついで「本当のシコツはどこか」について第三項 シコツ発祥の地についてを記述する。

#### 第一項 改名以前のシコツ

##### シコツの意味

知里真志保によると、シコツはアイヌ語でシコツ *Si-kot*（大きい窪地、大谷）という（以下アイヌ語発音の促音を表す場合は小文字の「ッ」とする）。「シ」は「大きな」「本当の・真の」という意味を表し、「コツ」は「窪地・凹地・谷間」の地形を指している。

##### 諸記録にみるシコツ

諸記録に現れた「シコツ」を年代の古い順に抄出してみると、おおよそ表6-1のようになる。絵図で最も古いものは正保元（一六四四）年、幕府が全国の御国絵図作成のために各藩に命じて提出させたものである。この地図は独立した地図としては残っておらず、わずかにこれを基にして作った「正保御国絵図」の一部として残されているだけである。この絵図

表6-1 シコツ名の変遷抄

和暦(西暦)年	文献(『 』)・地図(*)名	しこつ・シコツの記載	備考
正保元(1644)	*「正保御国絵図」	「ぬま」の図あり。日本海イシカリから太平洋ユウフツへ抜ける「シコツ越え」「ユウフツ越え」の道路を朱色で示す。	松前藩が幕府に献上した絵図。
万治元(1658)	『福山秘府』 (安永9年1780年に記録完成)	志古津に弁財天社造立を記録。	万治3年ご神体安置。松前藩の史料集成。
寛文10(1670)	「松前蝦夷蜂起巨細上申」	しこつ	「松前下の国しこつと申所の頭鬼菱と申狄」。
天和元(1681)	*「松前国蝦夷図」	志こ津	正保図を基本とし、長久保玄珠(赤水)作。
元禄13(1700)	*「元禄御国絵図」	志こつ	正保図を基本に改良したもの。
享保8(1723)	『松前年々記』	シコツ	「東蝦夷地シコツト申候所(略)困窮、飢死仕候」
享保16(1731)	『津軽一統志』	しこつ	「ウタウと申狄(中略)しこつへ行詰相果候に付」。
元文4(1739)	『蝦夷商賣聞書』	志骨大場所、志骨大将。	作者不詳、聞書きによる経済書。
寛政9(1797)	『蝦夷巡覧筆記』	シコツ川、シコツ沼(現長都沼)。	松前藩士・高橋壯四郎寛光著。
寛政11(1799)	『蝦夷日記』	支骨川、支骨沼(現長都沼)。	水戸藩医師・木村謙次(近藤重蔵の秘書役)著。 *この年、幕府は「千歳」を含む東蝦夷地を直轄地とする。
文化2(1805)	『休明光記』	千年、千とせ、千歳に改名。	徳川幕府箱館奉行・羽太正養著
文化4(1807)	『西蝦夷地日記』	千年川、しこつ沼(現長都沼)。	徳川幕府若年寄堀田撰津守の随行者、御小人目付・田草川伝次郎著。
文化6(1809)	『西蝦夷地旅行日記』	千年、千年沼、シコツ沼(現長都沼)。	津軽藩士・竹内甚左衛門著。
安政4(1857)	『夕張日誌』	支骨湖、志こ津、しこつ沼(現長都沼)。	松浦武四郎著。
文久3(1863)~5	『東蝦夷日誌』	シコツ湖、千歳。	松浦武四郎著。

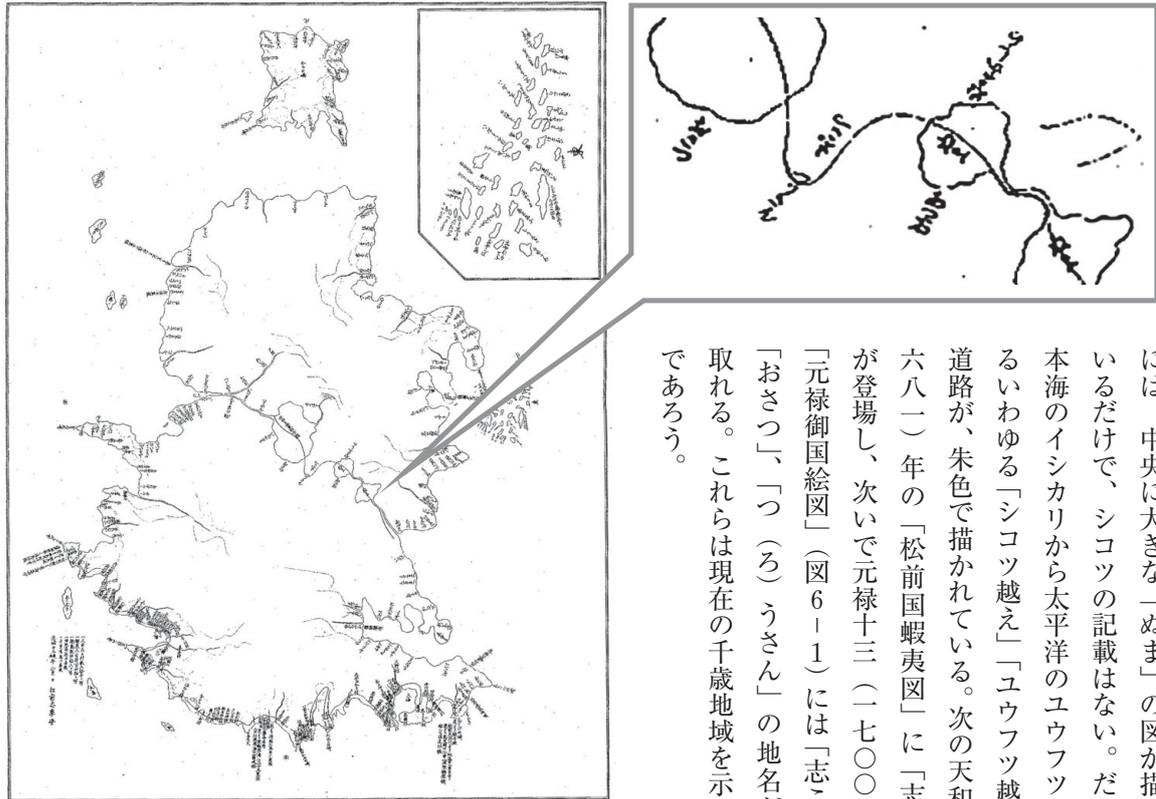


図6-1 「元禄御国絵図」元禄13(1700)年  
 (『新撰北海道史』第2巻通説1所収)

には、中央に大きな「ぬま」の図が描かれているだけで、シコツの記載はない。だが、日本海のイシカリから太平洋のユウフツへ抜けるいわゆる「シコツ越え」「ユウフツ越え」の道路が、朱色で描かれている。次の天和元(一六八一)年の「松前国蝦夷図」に「志古津」が登場し、次いで元禄十三(一七〇〇)年の「元禄御国絵図」(図6-1)には「志古津」、「おさつ」、「つ(ろ)うさん」の地名が読み取れる。これらは現在の千歳地域を示すものである。

蝦夷地・樺太を实地踏査した地図のうち、最古とみられている先の「正保御国絵図」は北海道開拓記念館『蝦夷地のころ』に所載されており、「松前国蝦夷図」「元禄御国絵図」の二点と比較すると、ともにこの「正保御国絵図」を基本に改良し、作成されていることが分かる。

これらの絵図・諸記録は、ともにアイヌ語の音をひらがな・カタカナ・漢字混じりによる一音一字の万葉仮名式で表記している。すなわち、「しこつ」(松前蝦夷蜂起巨細上申)「津軽一統志」、「シコツ」、「シコツ川」(松前年々記)『蝦夷巡覧筆記』、「志古津」(福山秘府)である。

漢字表記が現れるのが、「志骨」(『蝦夷商賈聞書』)、「支骨」(『蝦夷日記』)で、いずれも川名や場所名を指している。これらの記録の中で、最古のもので考えられる「志古津」の史料を次に示す。

(一) 志古津

『福山秘府』には「志古津」とある。同書は、松前藩主道廣が家老松前廣長に命じて編さんさせ、安永九(一七八〇)年に完成した松前藩の史料集である。

第拾式 「諸社年譜並境内堂社部」

一 如来堂 造営之由緒年号不明

東蝦夷地碓

〔按ルニ慶長十八年此堂建立ナリ〕

一 弁財天小社 安永七年ニイタリ一百年二十一年ナリ

同 志古津

万治元戌年造営 同三年神体ヲ安置

〔按ルニ実ハ万治三年造立ナルベシ〕

ここには万治元(一六五八)年、あるいは三(一六六〇)年に、東蝦夷地の志古津(現在の千歳)に弁財天小社を造立し、御神体を安置したこと

が書かれている。

『福山秘府』には、同書を編さんした安永九（一七八〇）年の時点で、北海道東部（東蝦夷地）の志古津の外にも弁財天を祀った五カ所として、箱館村（現函館市）・上之国村（現上ノ国町）・江差村（現江差町）・伏木戸村（現江差町）・突府村（現乙部町）が記載されているが、これらはいずれも和人体内であり、海岸部の漁場である。志古津だけが東蝦夷地であり内陸である。シコツに河川と漁の神の弁財天小社を造営したのは、シコツ川（のちの千歳川）流域でアイヌと交易をしていた和人であろうか。彼らは越年を許可されていなかった。『福山秘府』では当時、弁財天小社が志古津のどこに建てられていたのか位置までは読み取ることができない。

### （二）「志骨」

シコツが「志骨」として記載されるのは『蝦夷商賈聞書』（元文四（一七三九）年）（写真6-1）である。シコツは「志骨大場所也」として場所請負制度の運上人八人が紹介され、シナの樹皮で縛った縄を生産すること、鹿皮、熊皮、干鮭かほなど豊富な産物の出所が記述されている。ただし、「大場所」と記されているシコツは、現在の千歳地域のほかも含めた範囲を指している。同書により、初めて「骨」による表記が出てくる。

### （三）「支骨」

「支骨」は、水戸藩の医者木村謙次が幕府支配勘定近藤重蔵の秘書役として、エトロフ島（現北方領土）に赴き、初めて日本領としての標木を建てたとき



写真6-1 『蝦夷商賈聞書』に見える「志骨」、元文4（1739）年（函館市中央図書館所蔵）

の調査日記、『蝦夷日記』（寛政十一（一七九九）年）にみられる。

同日記では、「訪 差離屋 支骨流水湍 二三漁子宅 不知魚市中 何処差離屋」のように、「支骨」を漢詩に用いている。日記の平文ではカタカナ「シコツ川」を使用していることから、「志骨」「支骨」は、歯切れ良く表現したい場合や、漢詩など文字に対して特別な視覚を意識した場合に限って用いたようだ。木村は、千歳が鮭漁の不漁によって、二、三軒の漁家が空家状態となった様子を漢詩に記した。

また、時代は下るが、松浦武四郎の『夕張日誌』（安政四（一八五七）年）の絵図には「題 支骨湖図」（現支笏湖のこと）がある。羽太正養が文化二（一八〇五）年に「シコツ川」を「千歳川」に改名して五二年後のことであり、もちろん武四郎は川名には「千歳川」と記している。

このように、一音一字の表記が漢字表記に移行していく時期は、幕府がシコツを含む東蝦夷地を直轄地とし、松前藩が開設した場所請負人を廃止し、運上屋を会所と改めた寛政十一（一七九九）年の時期に重なる。エゾ地において内地的には和人によるアイヌ民族の支配が進み、和人の往来が頻繁になる。対外的には、元禄十（一六九七）年にはロシア人がカムチャツカ半島を征服、以降千島列島を南下し始め、安永七（一七七八）年はロシア人が松前藩に通商を要求するにいたる。天明七（一七八七）年はフランス船が日本北地を探検するなど、この頃からヨーロッパ船の出現も多くなる。幕府は国境を明確にし、周辺の地理を把握するために正確な地図等を必要とし、巡検（実地調査）を繰り返した。この過程において、アイヌ語地名の和語への置き換えも進むこととなる。

次に紹介する羽太正養が、「シコツ」を「千歳」に改名することにより、アイヌ語とは切り離された和名「千歳」が誕生することになる。

第二項 シコツ川を千歳川に改名

文化二（一八〇五）年、箱館奉行羽太正養が「シコツ川」を「千歳川」に改名した。改名の所以を、羽太は自著『休明光記』（巻之五）に次のように記している。同書は羽太の在任期間、寛政十一（一七九九）年から文化四（一八〇七）年に至る東蝦夷地経営の顛末を記録したものである。

文化元年 亀田村万年橋を造る。亀田村の橋なれば万年を以名とす。

文化二年丑年 ユウブツの内シコツ川といふ川有。此川の名となへあしければ改度よし、其所を受け持ちたる山田鯉兵衛よりいふ。彼川は鶴のあまた居る所なれば則千とせ川と改む。是も同年の事なり。

これによると、文化元（一八〇四）年、亀田村（現函館市）に架けた橋を亀にちなんで「万年橋」と名づけた。文化二（一八〇五）年、ユウブツ地域を担当している箱館奉行支配調役並山田鯉兵衛が、「シコツ川」は唱えてみると音の響きが悪いので正養に改名を申し立てた。正養は、亀田村の橋は「亀は万年」の中国の故事ちなんで「万年橋」と命名した。したがって鶴が多く棲息している「シコツ川」は「鶴は千年」にちなんで「千歳川」とした。『休明光記』からは以上のことがわかる。

釜加神社の厨子

このいきさつを記録したものが釜加神社弁財天を安置した厨子である。

厨子背面に次の一文が書かれている。  
あきらけき御代の御ひかりは、至らぬくまもなく、こさ吹（く）蝦夷が島までも御恵をかしこみ、たびまつる事になん。その島のうちに、ゆふふつてふ所に、しこつ河となんいへり川有、この河何とやらん、とのふるひびきのよからねば、山田嘉充が云ふよりて、そは鶴のあまたをり居る所なれば、千と世河ともいふべきやなど、たはぶれしに、夫（れ）なんよかめりとして、嘉充其（の）河のほとりに弁財天を勧請し、なお其（の）ことのあらましをしる



写真6-2 釜加神社（現：釜加72番地の11）



写真6-3 弁財天厨子の裏面

さまほし、といふにまかせて、遂に禿筆とりてつたなき言の葉かきつけ待るものなるかし。

末ひろきめぐみもしるし河の名の千とせをかけてしむる宮居は

于時文化二年乙丑春三月

従五位下藤原朝臣正頼謹誌

厨子由来文の要旨

「明るいご時世の光は国のすみずみまで照らしているので、えぞが島までもその恩恵をいただくことになるであろう。その島のなかの勇払という所にシコツ川という川がある。この川はどうしてだろうか、呼ぶのにひびきがよくないから変えてほしいと山田嘉充（鯉兵衛）がたのむので、その川は鶴がたくさん舞い降りて棲んでいる所なのだから、『千歳川』とでもいったらいいだろうと冗談を言ったら、嘉充がそれは良い名だとし、弁財天を勧請し祀るので、それに改名のいきさつを記してほしいと頼むので、日頃愛用している筆を取り、拙い文を書くことになった。

川の名のとおり千歳にわたっておわしますこの社は、いつまでもご利益

があらたですよ」(長見義三「市史つれづれ」『広報ちとせ』(昭和五十四年一月号)を一部改め、引用)

冒頭にある「明るいご時世の光は国のすみずみまで照らしているので、えぞが島までもその恩恵をいただくことになるであろう」という文言は、幕府による蝦夷地直轄の威光を顕示しようとする姿勢を表している。文中には、『休明光記』同様の改名のいきさつに加えて、山田嘉充(鯉兵衛)が、新たに文化二(一八〇五)年、弁財天を勧請したことも記している。

#### 弁財天を勧請

それでは、厨子を奉納した弁財天社はどこに造営されたのだろう。時代は下って安政四(一八五七)年、玉虫左太夫(仙台藩士)が記した『入北記』のなかに、造営位置の記述がみえる。

九月八日 快晴 朝白霜

(前文省略) 千歳川会所へ帰着、已ニ未牌ナレバ辺ヲ一見セント馬ヲ捨テテ歩行ニテ弁天社等ヲ一見シタリ。此弁天社ハ会所ヨリ申ノ方ニ当タリ一二丁斗リ行キ小山ニ安置セラレタリ、此間ニ土人家六七戸見ヘタリ、サテ千歳川ハ弁天社ヨリ二ツニ分レ会所傍ニテ又一ツトナル

千歳川会所とその船着場は、現在の千歳橋の近く、ホテルかめや(本町一丁目)の位置にあった。会所より申(西南西)の方角へ一、二町(二〇〇以前後)行ったところの小山に安置されている、といえは、およそ現在の千歳神社にあたる。現在は、千歳神社境内の参道の一角に、文化二年造営の弁天社の痕跡を示す石柱が立てられている。

その後、弁財社は地元の漁場持の新保清次郎が、明治二十二(二八八九)年、千歳川下流の釜加の自宅庭に堂を建て祀っていたが、三十八年、釜加の人々が釜加神社(現在の釜加七二番地の一一)を建立し奉納した。

#### 改名前の千歳(シコツ)

改名直前の千歳の様子を記録した二つの旅日記がある。

(一) 寛政十(二七九八)年、武藤勘蔵の『蝦夷日記』は次のように記している。

七月二十五日 シコツ越とてイシカリ川を船にて登る道あり。この道を出立す。トイシカリといふ所にて、船中に泊す。二十六日、未明に出船。イザリ川といふ所にて日もくれ、又々船中に泊す。(中略) 二十七日、夕がたシコツに着船す。二十八日、同所出立。船路にて東蝦夷地ユウブツに着船。一日逗留。

(二) 享和元(一八〇一)年、磯谷則吉は『蝦夷道中記』で次のように記す。

(五月) 四日、申刻過、ウツロ舟に乗(此舟は巾二尺計、長二間計の太木をくりたる也。棹取之夷人三人、番人一人惣て七人座したりてみな自由なりがたし) シコツ川を下る。早き事矢のごとし。壱里半計にしてオサツトウに至る。周廻凡五里計もあるへし。湖沼ナドノコトヲ夷人唱テトウト云。本邦ニテモ池沼ノコトヲ堤トイヘバ是モツツミノコトニテ塘ナルヘシ。ルウサンヨリ三里余にしてイヒツと言所に至るに、西の半刻頃なればいとくろふして、東西をわき難し。(後略)

#### 改名後の千歳

改名直後の千歳の様子を記録した二つの旅日記がある。

(一) 一つは文化四(一八〇七)年十月、石狩から千歳を経て勇払へ抜けた田草川伝次郎の『西蝦夷地日記』である。同書は、文化三年から四年にかけてロシア船が北辺を襲撃した後、幕府の若年寄堀田撰津守に随行して蝦夷地を調査したときの日記で、西蝦夷地直轄の下調べも兼ねていた。

千年川は御用地に成りて之名のよし 元はシコツなり、沼名、川名、地名と

も同じ、今□(不明)川名、会所、地名とも千年川なり イヘツの上シコツ沼なり、千年川はシコツ沼へ流入(略)

(二)次は、文化六(一八〇九)年、夏、勇払から千歳、さらに石狩へ向う道程である。津軽藩士竹内甚左衛門が、松前から宗谷にいたる蝦夷地検分時の行程を詳細に記した『西蝦夷地旅行日記 自弘前 西蝦夷地宗谷迄之往反』をみてみよう。同日記によると、竹内は千歳で一泊し、シコツ沼(現長都沼)、カマカを通過し江別川を下つてエベツブト、日本海の石狩湾へ抜けている。

一、七月廿七日 早朝止宿(ユウフツ)を發し、会所前壱町斗行川有此所より川船(丸木船数十艘有大将分之乗船壱二艘有幅壱間斗長さ五間位も可在丸木船は上口三尺位底式尺斗荷式筒斗入乗組四人船之者二人斗)流に廻りビビ迄五里之間川船也、川幅三、四十間 左右芦原流甚静也河上二里斗にて沼有ケフンケ湖と云長サ半里余内廻二里斗と見ゆる(ケフンケの沼ハ勇武津川水源也此所より四方打ち開けたり 申西之間太郎前嶽戌の方シコツ山の方白老白辺之高山打続く丑寅に當り石狩嶽ユウバリ山何れも高幽に見ゆる近辺山なく洪漠之土地也)夫より半道程船行、小休所有是迄之内河式筋落合ふなり。小休之辺より段々川幅狭くなり、左右諸木多し、壱里半里斗舟行き、川筋屈曲にして幅五六間位も有可、段々水上に登り次第幅式三間になる 昼所ビ、是迄五里の川船也(勇武津川水上ビ、湧水にて小沢なり)支度処蓬屋を設け夷家もなし(都て此川不深五六尺かきりと見へ故に流にのほると雖も棹越るる故船はやく櫓橈りかを用へす)昼所より野山壱里余行キシヤラコと云ふ所休所有(此辺林中白砂にて道甚よし)又半道程行て、小橋有 此流れ壱丁程上に夷家四五戸マ、ツと云ふ所道と聞 是より程なく千年に至る(もとハシコツと云ふ、近頃改る) 昼後二里都て林中也會所有 造作相応此所止宿(夷家廿戸斗漁獵少く仕入負に至るゆへ、唯通行の為に会所を設置

と云ふ)行程(川船五里、陸二里)

一、同廿八日 早朝千年を發し会所前より直に川船流に従て下る 河幅十間位 左右樹木多し、數町行て河兩流になれとも、無程落合ふ也 此壱里程の間 急流にして水清く底見ゆるなり 段々川幅広くなり、十四五間も可有 壱里半程船行千年沼に入る(もとハ、シコツ沼と云ふ湖の入口六七丁前より川幅広く浅し 船難航所有沼の内も深さ三四尺位も可有浅く見ゆるなり) 此湖の長さ壱里半も可有哉、内廻も四五里斗と見渡る、湖を行畢り川に移る 左の方に夷家有ハマカと云ふ(是より末をイベツ川と云ふ 此辺川幅広し以下段々流も静かに水濁り甚深く見ゆる深き故静かぶに甚強し見ゆれと水勢い) 數拾丁船行左の際に休所有此の辺より河の左右際高く河幅広し所により廿五六間より卅間位にも至るへし都て此河通り左右より雜木繁茂せり昼所イザリブト迄船行五里(九月七日帰路の節イザリブトより新道陸行なり、川向よりイザリ川に拾斗行、此辺芦原にて打開けたる所也、夫より林に入り式斗行き、野辺を行、止宿より二里斗芦野を行林に入る范所々に有れども林中道よし一里半程行きし野合有ラサツと云ふ 昼支度蓬屋よまきや有夫より無程林之内へ入り一里半程行千年川に至る 川向否会所也 川船渡し川船も五里陸道も五里也今日船と陸と同刻出立して千年着も同刻也) イザリブト普請相應會所有也(登にハ此所止宿に相成ル) 昼後九里の川船止宿エベツブトに至る此所石狩川エベツ川落合にて河幅広く甚深しと云普通行屋甚廉略野宿同様也 今日之行程川船十四里(此所夷家三軒有 船ハ千歳より通シ也 帰路の節は此九里の川船一日路也 登り船故尤も遅し 夜中に止宿を發し 漸々暮時にイザリブトに着致ス 櫓橈のミにて急流を登る故存之外果散とらし旅人可得心なり

田草川と竹内の二人とも、勇払場所請負人山田屋文右衛門が文化二(一八〇五)年(一八〇九)年の間に開削した、千歳を挟んで東側の千歳

くビビ間（二里）、および西側の千歳（六里）の「新道」を通っている。千歳くビビ間は、牛馬車を通すよう整備した「ビビ山道」といわれる。また、石狩から帰路の竹内甚左衛門は、石狩川（千歳川）と漁川が合流するイザリブト（現恵庭市域）で船を降り、陸路をとった。林を抜け、オサツ川を渡り、千歳会所まで歩いて到着した。その時の様子を「船、陸路ともに五里の行程で、到着時刻も同じであった」と記している。この漁太くオサツく千歳の新道は、千歳川を船で遡るとき、標高差により急激に流れが速くなる千歳会所下流一キロ付近の難所を回避できることから、重要な道路となる。

のちの安政五（一八五八）年に島松く千歳間が開削され、銭函から発寒、札幌を経て豊平川を渡船で渡り、ツキサップを抜けて千歳に至る河川に頼らない街道が完成すると、松浦武四郎はビビから千歳、千歳から札幌・銭函までの陸路を「東西新道」と呼んでいる。

以上二つの旅行記は、寛政十一（一七九九）年の東蝦夷地直轄を画期として、文化二（一八〇五）年以降シコツ川は千歳川に、シコツ会所は千歳会所に、シコツは千歳に変わったことを記している。

### 箱館の亀田との関連

『千歳市史』では、千歳改名の年次とその理由を、現函館市の亀田改名説に依拠して解説している。すなわち、「渡島大野付近と千歳付近をアイヌはシコツと呼んでいた」、「シコツは死骨に通じ、しかも千歳の近くにはユウフツがあつて、これは『有佛』に通じて不吉なので、渡島のシコツは当時すでに水田化されていたので、亀田と命名し、千歳の方は深い葦原で鶴が沢山生息していたので千歳とした。これは文化二年のこと」。

ところが、この説は『函館市史 別巻亀田編』（一九七八）による以下のような検証と判断に基づき根拠を失っている。

文化四年『松前紀行』に、「亀田川を越え万年橋を渡るこのあたりは志こつといひしが、ゆゆしき名なるとて近頃改めしとぞ」とあるが、

(一)「亀田」の地名が最初に見られる文献は、この文化四年よりも一三七年も前に遡った寛文十（一六七〇）年の『津軽一統志』の記事に、「一、亀田川有 潤あり 古城あり」と、すでに「亀田」が記述され、寛文年間（二六六一〜七二二）の地図にも書かれている。

(二)「函館の「志こつ」は『松前紀行』以外にはその名すら発見されていない。『松前紀行』の他の箇所では、シコツはもつと広域の意味で使用されている。

(三)「シコツは死骨に通ずる発音なので、縁起の良い亀田に変えた」という説は、明治以前の文献には見当たらない。

(四)永田方正は明治二十四（一八九一）年、『松前紀行』を引用して『北海道蝦夷語地名解』に渡島の「シコツ、大谷、亀田辺ノ元名」としたのではないか。明治以降に『松前紀行』の「シコツ」と「亀田」の両者のつながりを上手く結びつけるために考え出したものであろう。

(五)渡島の亀田命名説は「亀が生息していた」など他に諸説がある、と説明している。

したがって、『千歳市史』の更科源蔵による解説部分は、明治以降の永田方正を引用し、さらに羽太正養の『休明光記』に余分な自説を加えたものである。

ここで明確なのは、羽太正養が亀田村の橋を亀にちなんで「万年橋」と名づけたのが文化元（一八〇四）年、シコツ川を鶴が生息するので千歳川と改名したのが翌年の文化二年ということである。つまり、羽太正養は万年橋との関連で千年の千歳と命名したのである。

## 第三項 シコツ発祥の地

アイヌ語地名では、地形や場所の特色・形状・植生を指して呼ぶことが多い。では、実際のシコツはどの場所・地域を指しているのであろうか。これについては次のような諸説が述べられている。

(一) 知里真志保は一九五四年、シコツはもつと広い範囲の地域を指している。「つまり、石狩・勇払間の石狩低地帯を指し、東西南北からの口をそれぞれ、夕張(イ・プツ) それの・口)、漁(イ・チャル) それの・口)、ユウフツ(イ・プツ) それの・口)、江別(イ・プツ) それの・口)と呼んだのであろう」としている。

(二) 山田秀三は一九七八年、地形を基準にしたアイヌ地名のつけ方の「くせ」から考えると、千歳市内の地形は小さくまで明瞭な該当場所を挙げる事ができず、「解しにくい」と言う。支笏湖に向かって、市街地から上の方を眺めると、丘の合間が広い谷間の地形をなしているので、千歳川の谷間を呼んだのであろうとしている。

(三) 長見義三は一九七六年、①石狩、勇払地方を含む道央低地帯、②千歳川の全流域、③ふ化場から上流の溪谷、④旧千歳市街を中心とする千歳川下流の地帯としながら、「統治するという観念のなかった古代人は、広大な地域を示す地名を必要としなかった。狭い範囲の生活で事足りたほど天産豊かであったからか。その意味で①②③は疑問である。ただ④は「ふじや地名解」で古老方の支持を得ている。またかつて、知里真志保が北栄(市内)の坂から市街を見下ろして「これがシコツ」と叫んだと伝えられている。古人は自衛隊第七師団寄りのキサラオマコツの方を小さい窪地と意識し、それに対してここ北栄をシコツと呼んだか」と記している。

(四) 長見は一九八三年、『増補千歳市史』においても、シコツの位置については前記③の説明までで擱筆している。

## シコツとポロコツ

では、本当のシコツはどこか。この疑問に対して新たな説が登場した。

(五) 榊原正文は平成十四(二〇〇二)年、シコツに対するポロコツ(広い窪地・大きな窪地 Porokot)が、明治二十九(一八九六)年陸地測量部五万分一地図にカタカナ表記されていることを指摘している。

ポロコツの地名は、千歳川を越える街道に架かる橋(現在の国道36号「千歳川橋」にあたる)の約二キロ北西側の「窪地(現在の千歳市信濃)」に記載されている。同地図では「ポロコツは最大幅二〇〇メートルの谷・凹地として描かれているが、現在では市立北斗中学校の西側(自衛隊演習場内)に、幅一〇〇メートル程の凹地が二つ並んで合計幅二〇〇メートル、深さ一〇メートルとなって残存している。同校の東側は市街地に埋め立てたために復元できないが、長さは一キロは続いていたものと推定され、その地名が意味する通り、かなり規模の大きな凹地であったものと考えられる」としている。

では、対する「真に大きい・広い窪地」であるシコツはどこなのか。それは、青葉公園がある丘陵と北海少年院がある丘陵に挟まれた河谷である。市内地図を見ると、国道36号から千歳川上流に向かって現在の錦町・緑町・春日町・大和・桂木の各字名一帯が、千歳川対面の青葉公園の山の法面として、「ポロコツよりも大きい凹地状態で長さは約一・五キロ、幅は七〇〇から八〇〇メートル、深さ二〇メートルである。この場合、谷・窪地の形状を深い溪谷・窪地というよりも、広い谷・窪地と捉えたほうが適切である。

知里真志保や山田秀三も榊原とほぼ同じ場所を指摘している。ここが本当のシコツ、つまりシコツ発祥の地としても良いであろう。図6-2で説明すると、斜線模様で表した一帯を指している。小さい方がポロコツの広い窪地で、対する真に大きい広い窪地が、大きい方の斜線一帯のシコツ地域である。

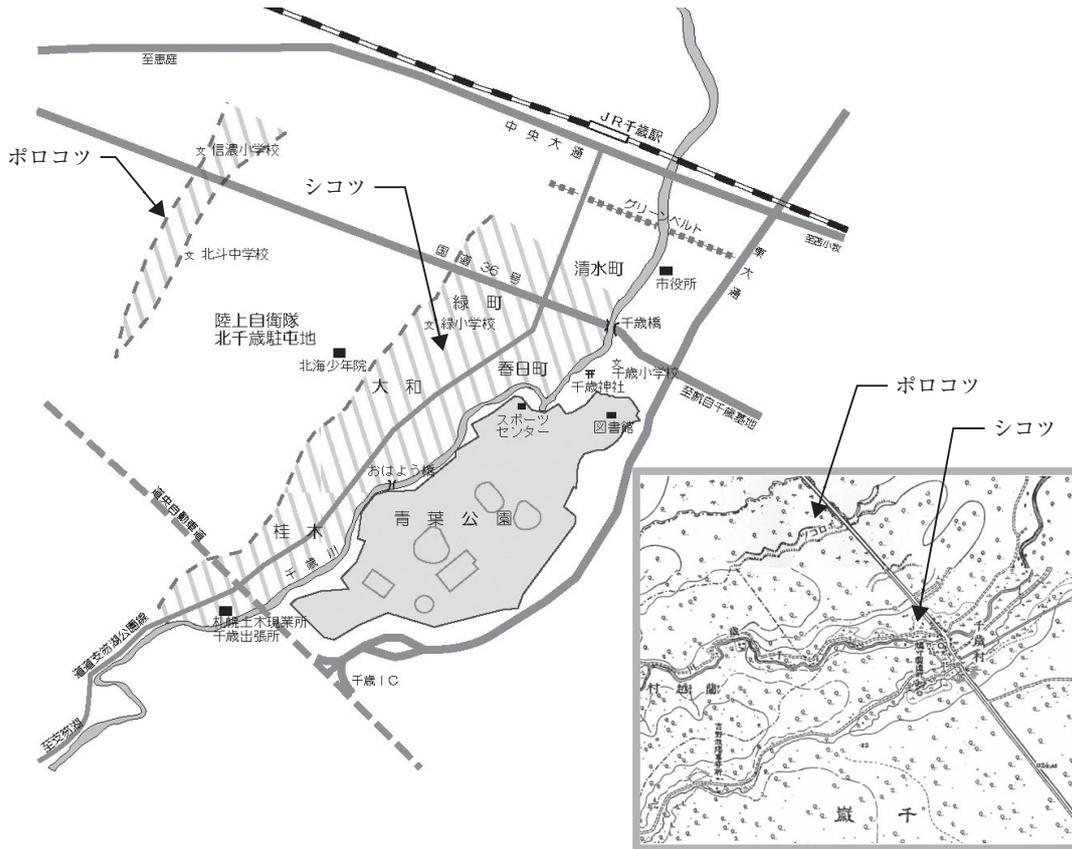


図6-2 明治29年(右)と現在の地図におけるシコツ、ポロコツの位置

シコツ、ポロコツの二つの窪地は、ともに、安政四(一八五七)年、箱館奉行が勇払場所請負人山田屋文右衛門、石狩場所請負人阿部屋伝次郎に對し、水路によらない道路の開削を命じ、翌安政五年に完成した街道(現国道36号)を横断する共通性を持っている。シコツアイヌの人々は、『福山秘府』に記録された万治元(一六五八)年から、明治二十九(一八九六)年頃までに至る約二四〇年間、シコツとポロコツを目印や道標として、効果的に使い分けて生活していたのであろう。

寛政十一(一七九九)年に徳川幕府が東蝦夷地を直轄とし、さらに文化四(一八〇七)年には西蝦夷地も直轄とする。この間の文化二年に千歳に改名された。それ以前は、川名、地域名、沼名をシコツと呼んでいた。ただ、沼名については、現在の長都沼を「シコツ沼」と呼んだ先述の田

草川伝次郎や竹内甚左衛門の例と、一方、現支笏湖と認識して呼んでいる勝知文(福居芳麿)や磯谷則吉の例がある。勝知文は、『東夷周覽』(享和元(一八〇一)年)で「シコツ沼。此沼より落る水筋をシコツ川と云」。

磯谷則吉は、『蝦夷道中記』で「シコツ川と云、水源はエニハノボリの桮シコツトウより流れ出ル」と記している。このように「シコツ沼」は、二通りに認識されていた。認識の相違がどこから生じたのか。シコツ沼はシコツ川の水源だと理解している勝や磯谷は、「タロマヘノホリ」(現樽前山のこと、ノホリ(ヌプリ)は山の意味)、「イシャリノホリ」(現恵庭岳)を実際に踏査している。あるいは、案内人のアイヌ民族を石狩やユウブツから頼んで来た場合は、千歳地方の細かい地名について不案内のため、単純に一般的な呼び名として沼を「シコツ」(窪地)と呼んだのかもしれない。

シコツ沼が、「支骨湖」の名称と漢字表記になるのは、松浦武四郎の安政四(一八五七)年『夕張日誌』が初出である。現在、シコツの名称が残され、継承されているのは「支笏湖」のみとなった。

第二節 支笏湖をめぐる

河川にはアイヌ語で呼ばれた川名が比較的多く残されている。川は、アイヌ民族にとって生活の糧を得るための漁場として、さらに交通手段としても重要な存在である。

川について知里真志保は、アイヌの生活に即して「川は海から陸へ上がって、村の側を通って、山の奥へ入り込んでいく生物」「川は女性、という考え方が自然に生まれてきた」（知里真志保『アイヌ語入門』）と説明している。すなわち、「川は上流の源流部から流れて、海に下る」という日本語の概念を逆転させること、併せてまた、女性の身体で表現している場合もあることもアイヌ語川名を解するときの基本とするよう指摘している。

第二・三・四・五・六節においては、千歳市域を流れる各河川水系を中心に巡ることにする。基準とするのは、松浦武四郎『夕張日誌』、長見義三『ちとせ地名散歩』、『増補千歳市史』、榊原文『データベースアイヌ語地名3 石狩Ⅱ』から採録し、知里真志保『アイヌ語入門』、永田方正『北海道蝦夷語地名解』、山田秀三『アイヌ語地名の研究』などにより解することとした。なお、河川項目名の下に付した①～⑥⑧の番号は、図6-3「千歳管内河川図」にある各河川名番号（①～⑥⑧）を指している。

（以下は図6-4を参照）



図6-3 千歳管内河川図



図6-4 「支笏湖をめぐる」地名

第一項 湖岸をめぐる

支笏湖 Sike-to-shi-cot-to (シコツの・湖)。シコツ川の湖を意味する。今泉柴吉翁が伝え解釈したシコテムコトホ（大沢の奥のその湖）や単にバラト（広い・湖）と呼んでいたという。漢字表記による「支笏湖」は、『夕張日誌』に登場する。現在の「支笏湖」になったのは、明治十六年、開拓使が廃使にあたり編さんした地誌『北海道志』以降のことである。

知里真志保は（湖の神）への祈り言葉を伝えている。

タイ シコツ エムコ エ・アン パラ・ト トウ・コル・カムイ

このーシコツ川のー水源ーにーあるー広いー沼ー（その）沼をー所有するー神よ

（祈りの時には荘重な呼び方としてシコテムコエアンバラトと呼んだという）若い姉妹が巨大なアメマスと六昼夜格闘して父の仇をうつユーカラの雄編がある。この湖とアイヌ民族とのかかわりを伝えている。また、その、神謡の終わりは同時に地震の説明にもなっている。

「いちばん大きな魚の肉をすけると、巨大なアメマスになって、沼のまんなかに、じつと動かずにいる。（中略）沼がしらの（中略）沼のまんなかの（中略）沼じりの、やなぐいを守る神がある。その神がすこしでも油断すると、アメマスが動く。すると地震が起こる」。

周囲約四〇〇キ、透明度一七・五メートル、最大水深三六三・〇メートルで日本第二位のカルデラ湖。日本最北の不凍湖。昭和二十四（一九四九）年に支笏洞爺国立公園となる。

トウヤ toya（湖沼・の岸）。『夕張日誌』は、シコツ湖の沼傍と訳し、トウヤに出るとある。「ネツソウ、・爰こゝより下を望めば百余間のところ、岩立て水怒り、逆波恰も精水を流すが如く、其様比する物なし。是シコツ沼トウの銚子口チャロ也。上は碧水洋々とし、深く魚籠をも潜ましむ。勢

二百間計を過トウヤ沼傍に出る」とある。川を上り湖に入るところを「クツチャロ」(のど口)という。

武四郎はトウヤ(湖畔)で寄木を組んで筏を作らせ、それに乗り、千歳川対岸にあたる現在の湖畔ペツパロ(武四郎は「ベツハラ川口」と書く)に渡り、湖上からシコツ湖探索に出ている。洞爺湖付近の住人はトウヤを固有名詞として呼び、シコツの住人はトウヤを湖畔と称した。観光地となっている。

**湖畔** 昭和二十六年五月一日、大字廃止と字名改正により、それまで烏柵舞村の一部であった、支笏湖東岸の市街周辺を独立させて地名とした。支笏湖温泉と呼ばれる温泉街となった。太平洋戦争敗戦後の占領期、翡明閣と王子クラブが米軍将校の保養施設に接収されたこともある。

明治四十一年(一九〇八)年、苦小牧王子製紙工場の軽便鉄道が、支笏湖下流にある発電所の工所用資材の材木などを運搬するために設置された。苦小牧から資材とともに便乗した観光客や、生活用品の買い物をする湖畔住人たちの大切な交通機関となった。湖近くをのどかに走る姿は風物詩でもあったが、昭和二十六(一九五二)年に山線鉄道は廃線となった。

昭和五十四年から、平成十一年に千歳市有形文化財に指定された山線鉄橋付近の広場で、厳冬期に氷のオブジェを楽しむ氷濤まつりが行われるようになった。植物、動物などの豊かな自然を楽しむための案内所支笏湖ビジターセンターもある。

**シリセツナイ**⑫ *shiri-set-(un)-nay* (鳥の・巢(のある)沢)。明治の一期、地図上でシリセツナイと記されていた。武四郎も「シリセツナイ小川」と書いている。シリ(*shiri*)はチリ(*chiri*)が転訛したもので、この鳥は鷺・鷹のことを指す。紋別岳南斜面に水源を持つ沢。現在の地図は「シリセツナイ川」となっている。明治期以降昭和五〇年代まで、ヒメマス鱒

化場が取水していた。長見義三によると、鷺は昭和十〜二十年代(一九三五〜四五五年ころ)は湖のまわりに飛んでいたという。

**ポロシレト** *poro-siretu* (大きな・山の・鼻)。紋別岳の走り根先で「湖畔」に一番近い岬。有料道路のためその先端は削り取られている。

**アツウシピナイ** *atsupinay* (オヒョウ木皮の群在する・涸れ沢)。武四郎はアトウシヒナイと書く。山田秀三は、ピナイの意味は意外と分らないとするが、*pit, pi* は石のことで、「石の川」。石の川が転化して涸れ沢。知里真志保によると、*pin* ナイ(*pinai*)は「*pir* 傷・*nai* 川から来ている場合もある。傷のようにえぐられた沢」ではないかという。

**イカウシピナイ** *ika-us-pinay* (山越えを・いつもする・涸れ沢)。「湖畔」の大地からこの沢の出口の湖岸までの、山越えの近道であったという。また、熊の山越えの路の意とも言われる。武四郎はイツウシヒナイと書く。ピナイは涸れ沢のほかに小石沢の意ともとれる。湖畔から数えて七番目の岬を曲がることから「七曲」(ななまがり)とも呼ばれる。

**フブウシピナイ** *hup-us-pinay* (トドマツ・群生する・涸れ沢)。武四郎はフウシナイと書く。知里真志保は、*fu* (トドマツが) *su* (群生する) - *up* シピナイと発音するのが適当だと指摘する。山田秀三は「フツプシ」とする。

**恵庭岳** 元の名前はエエンイワ *en-iwa* (頭・とがった・岩山)。

**ポロピナイ** *poro-pinay* (大きな・小石・川(涸れ沢))。知里真志保の「傷のようにえぐられた沢」がふさわしく、噴火で破壊された恵庭岳の大決裂は恵庭市に正面を向けているが、それを源流とする涸れ沢。この涸れ沢とは、川床に水が無く、伏流水として地下を流れている状態を意味している。支笏湖を巡る国道453号が恵庭岳東側を回って「幌美内」(ポロピナイ)を通過し恵庭市へ抜ける。道道が国道453号に昇格した際に、切り離さ

れた丸駒温泉への二・七五<sup>キ</sup>を「道道730号丸駒線」に指定した。この道を行くと、いとう温泉と丸駒温泉に着く。

タプコプラ tapkopi-ra (たんこぶ山・ふもと)。長見の聞き取りでは、古老は丸駒温泉の地といい、この「たんこぶ山」は恵庭岳を指すという。永田方正は「恵庭岳の半腹にある小山」とする。武四郎は「タツコフラ 崖下」と書く。

滝沢 丸駒温泉へ出る涸れ沢。雨後には五つの滝がかかるといわれる。

ペンサイエムコフ pensy-emkoho (弁財船・の半分)。丸駒温泉西端につきでている岬状地。平らに整地してある位置から、支笏湖に向かって巨岩が積み重なっている。その巨岩を難破した弁財船(北前船)の破片に見立てたようだと、長見は言う。バチエラー辞典にも支笏湖に浮かぶ葦造りの弁財船のユーカラが収められている。アイヌと和人の葦人形六〇体が一つの弁財船を漕ぐ様である。

リリケ ririke (その波の・所) 大崎といわれている。明治二十(一八八七)年『改正北海道全図』に採録されている。武四郎はこの崖下にくると西風が吹き起こり「志こつの湖に筏より掉さしゆけば魚のより来る」と書く。

オコタンペ川⑩ Okotan-unpe (川口に・村・の在る・もの)。オコタンペ湖から流れて、恵庭岳の西側ふもとをくだり、ポンオコタンペ川を合して支笏湖に注ぐ。道道78号支笏湖線を走ると、カワガラスの姿を目にする。川口すなわち支笏湖に注ぐ口は、キャンプ場になっている。武四郎はヲコタヌシヘツ(小川、湖中第一の川也)と書く。

オコタンペ湖 オコタヌンペト okotanunpe-to (オコタヌンペ・湖)。

周囲五<sup>キ</sup>の小さな堰止湖。水の色は碧。

奥潭<sup>おくたん</sup> 永田方正『北海道蝦夷語地名解』は、恵庭岳の下に古村があったが

恵庭岳の噴火により一村埋没したとある。昭和二十六(一九五二)年の字名改正の際、オコタンペカワ付近を中心に、それまで烏柵舞村の一部であったのが独立してこの名となった。

オコタン崎 かつて戦後、支笏湖グランドホテルが建っていた付近の岬状の地。そのホテルも昭和五十七年に休業し、その後閉館した。

フレナイ⑨ hurenay (赤い・沢)。

白銀沢 千歳鉱山の鉱脈「白銀」の名前。

ニナル川⑧ 漢字表記の時代は「丹鳴川(になるかわ)」ninar-sut-oma-nay (高原の・ふもと・に入る・沢)。武四郎はミナルシトマナイと書く。

第二項 千歳川(美笛川)をのぼる

千歳(美笛)川④ 美笛<sup>びふえ</sup> dipoy. ピイ(小石原・群在する・もの(川))。

武四郎は、「ミナルシトマナイ小川、上るフウレ岳平山と云ふ。フウレ岳十七八丁、ヒフイ小川、湖の岬に当り、并て十丁、フウヨナイ」と書く。

ロ(石)が現状を表して、小石だらけの清流の川。

明治期の地図に美笛川の名称を確認できないが、大正九年の五万分一地形図に支笏湖に注ぐ沢を美笛川と呼んでいるのでこの頃以降にモシルンピイ川を美笛川と呼び始めたようだ。支笏湖に注ぐ場所は、かつて千歳鉱山の船着場であったが、昭和六十一(一九八六)年の閉山により、二〇〇九年現在は、美笛キャンプ場として整備され若者たちで賑わっている。湖面に突き出た何本かの杭が棧橋の名残を止めている。

フレ岳を源とする川(無名)が、美笛川本流を吸収して千歳川と呼称し始めたのは、千歳川河川事務所によると、昭和四十二(一九六七)年の政令以降と推測するが不明である。最新の国土地理院電子版では美笛川の名は消えている。

モシルン美笛川⑥ (モシルンピプイ mosir-un-pipyu モシルンピプイ) (中の島・に入る・美笛川) 選鉱場のあったモシリ (島) の右へ上るのがモシルンピプイ。元は美笛川と呼ばれていた。

三哩の沢川 原名クツパオマピプイ kut-pa-oma-pipyu (縞状崖・のみ・に入る・美笛川)。湖岸美笛の船着場から元千歳鉱山に向けて三哩の地点にある美笛川支流。

草笛川⑤ 原名オロウエンピプイ oro-wen-pipyu (その所・悪い・美笛川)。美笛川右岸。千歳鉱山が稼動していた頃の中心街の谷地を流れていた。長見義三によると、山狩りで変事があったことに由来するとも言われている。

鳴尾川⑦ モシルンピプイに流れ込む小さな谷川で、現在は道路の下をコンクリート管で導入されており、人目につかないほど。付近一帯は橋名に千歳橋、八千代橋、永代橋が残り、地名には旭ヶ丘、舞園、草苗などがあつた。華やかなこれらの名前はかつての人口三〇〇〇人を超える鉱山街の繁栄振りを物語っている。現在は原野に帰している。

福神川 (沢) ② 原名は不明。美笛右岸の小沢。沢口に千歳鉱山の稼動していた福神鉱があつたが、昭和六十一 (一九八六) 年閉山となり、翌六十二年に採掘権が放棄された。

ソウオンピプイ① so-un-pipyu (滝・に入る・美笛川)。美笛川本流は、元千歳鉱山事務所から約二キロあまり上流で、小さな支流福神川と大きな支流ソウオンピプイ (ソウオン美笛川) を左に分ける。ごろ石の背を飛び飛び流れを一キロ程登って高さ五〇メートルの滝がある。美笛峠から遠く眺められるので「見返りの滝」と呼ばれる。

坑口の沢川③ 旧名はフプウシピプイの可能性もある。鉱山の坑口に由来しているが、何時の時点でこの呼称になったのか不詳。

フプウシピプイ fu-us-pipyu (トドマツ・群生する・美笛川)。草笛沢のすぐ上、美笛峠への登口に出る沢。

第三項 支笏湖岸に戻って

砥石山 原名不明。ルヨナイを参照。

ルヨナイまたはルイオマナイ ru-yu-nay (砥石・のある・沢)。支笏トンネルが開通して以降、この沢はトンネルの下を通って湖へ流れこむ。明治三十 (一八九七) 年ごろ、この沢で白・黄・黒の砥石が採掘されたという。

多峰古峰山 たつぶこぶやま 原名モユクンタプコブ moyuk-un-takop (ムジナ・いる・タンコブ山) 支笏トンネル入り口手前の位置。白老台地の端にある。

支寒内沢 しせむない sian-nay シシヤムナイ (和人・沢) か。時代は飛騨屋久兵衛の石狩山伐木のころか、明治期のことか定かではないが、造材に和人が入っていたことがあつたという (長見義三)。北海道方言では、アイヌ系日本人 (いわゆるアイヌ) に対して、内地系日本人を和人あるいはシヤモ (shamo) という (知里真志保『アイヌ語入門』)。

落畑 ちさばやし 原名ペウレプ dewrep (幼い・者) 当歳グマのことか。風不死岳ふもとの涸れ沢の名。落が繁茂しているのでこの和名が生まれた。原名は、水の源である北山の原名ペウレプによるものだろう (長見義三)。

北山 (ペウレ) きたやま この和名の由来は不明。樽前岳と風不死岳の間の小山。風不死岳 ふぶしだけ 原名 hup-us-nupuri (トドマツ・群生する・山)。知里真志保は EP (ウプ・フプ) と発音すべきという。ふつぶし岳ともいう。

大崎 おおさき 原名 marati-sumasaki マラットシユマサキ (クマの頭の・岩・崎)。クマ祭りのあと、鼻の辺りの皮だけつけてクマの頭骨を祭場に飾つた。その頭に似た形をした岩が崎の湖中にある。「サキ」は日本語なので比較的新しい名ではないかとされている (長見義三)。

シリシュット *si-sut* (山・麓)。風不死岳のモラップ側の水際の地名。

シリシュットピナイ *si-sut-pinay* (シリシュットの涸れ沢)

樽前岳 原名 *ohuy-nupuri* (燃える・山)。樽前の原名タオロマイ(高岸のあるもの)は樽前川のこと。「タルマイ」と転訛し、それが「場所」の名前、山の名前になったという(『苦小牧市史 上巻』)。

ホール *houi* ホール・*poru* ポルともいう(洞窟・どうくつ)。『夕張日誌』も「ホール小川」と書く。アイヌ語の母音は短く発音するのが原則だが、地名の場合、先頭にきて、なおかつアクセントがあるときは、その語を長めに発音する(知里真志保)という。ホール・ポールとなる。永田方正は「ホロアナは三、四人が入れる。アイヌ宿することあり」と書く。長見義三によると、シリシュットの浜の東端に四つの洞窟が並んでいて、昔、湖が荒れて高い岸に穴を掘ったらしいが、湖水がダム化されて水位が上がって洞窟が水浸しとなり、破壊されたという。

ユクトラシピナイ *yuk-trasi-pinay* (シカ・それに沿って登る・涸れ沢)。ここからモラップまでの沢は、みな砂の涸れ沢であったという。

ユクルベシピナイ *yuk-rupespe-pinay* (シカ・沿い下る沢の・涸れ沢) 別名クチャワッカナイ *kucha-wakka-nay* (狩小屋の・飲み水・沢)。高橋長助の『支笏湖沿革史』には、一〇一四林班にあるこの涸れ沢は、上流に水が流れていて鹿の水のみ場であったと書かれている。

モラップ *mo-rap* (小さな・低い・もの〈山〉)・二つのモラップ山があるが、「湖畔」に近いほうが、キムンモラップ(山手のモラップ)、苦小牧側にあるのが、ピスンモラップ(浜手のモラップ)である。ほかにオキムネアン、オピスネアンとそれぞれモラップを付けての呼び方があるが、同じく「山手の」「浜手の」という意味である。モラップはこのように山名であったが、現在は付近一帯の地名となり、休暇村・キャンプ場となって

いる。

中モラップ 原名モラップウツル *morap-uturu* (二つの)モラップ山・の間)の意味。

## 第三節 千歳川をめぐる (一)

## 第一項 支笏湖から市街地へ下る

千歳川④ 原名をシコツペツ Shikot-pet (シコツ・川) という。源を支笏・樽前火山群のフレ岳とし、支笏湖を経て千歳市街を下り、石狩川に注ぐ。『夕張日誌』では元の長都沼までをいい、その先は江別川だった。明治期は旧夕張川との合流地点まで、戦後の切り替えて江別川の名称が消滅し、石狩川との合流地点までを千歳川という。全長一〇八<sup>キ</sup>、そのうち市域を流れるのは、六九・〇<sup>キ</sup>。

ペツパロ pet-paro (川・口)。『夕張日誌』は「ベツハラ川口」と書く。

ベツとベツは「川」を指す。千歳川の入り口のこと、支笏湖の湖畔と呼ばれている辺り。アイヌ民族は、川を生物と捉えるため、川は海から上がり、村を通りぬけ、その奥の湖に入る、という順序となる。したがって支笏湖から流れ出すのではなく、千歳川が支笏湖に入る口と理解される。逆に支笏湖から千歳川への注ぎ口として、『夕張日誌』はチャロ(銚子口)と書き、説明している。

ネツソウ net-so (寄り木・滝)。翡翠橋のすぐ下。現在、水はほとんど無い。支笏湖から一番目の滝のため、漂流木がひっかかった状態の滝をいう。

ポロソウ poro-so (大・滝) 『夕張日誌』は「ホロソウ、大瀧、高さ五丈ばかり」。分岐点の少ししもて。わずかに滝の姿を残している。

ホラキソウ horaki-so (崩れた・滝)。滝の千歳川寄りが欠けている。

ウヌンコイ ununkoy (峡谷)。

ルツケイ rukkei (崩れた・所)。右岸台地の崖が崩れている。

クワンケイ kuara-un-ke (仕掛け弓・ある・所)。紋別岳を棲家にするク

マの通路となっていたようで傾斜が緩い沢のため、アイヌの人が毒矢を仕掛けたという。

シビパ沢 supi-pa (その激湍の・かみて)。王子製紙第一発電所のかみて左岸支流。第一発電所が明治四十三(一九一〇)年に完成し、ネツソウから暗渠送水路により引水して落とす。その貯水池を「水溜」と呼んでいたが、地名改称で「水明郷」となった。明治四十五年にここで生まれた畔柳<sup>くろやなぎ</sup>二美<sup>ふみ</sup>は、短編「山の子供」に当時の情景を描いている。「ダムには五つの水門が並び、さらにそこから谷底に向かって巨大な黒い鉄管が五本、真つ直ぐ伸びていた。クローバー原のはずれにたつて見おろすと、その黒い鉄管の先には赤煉瓦の発電所がマッチ箱ほどの大きさをみえて」いた。王子製紙苦小牧工場の軽便鉄道は苦小牧から発電所間に敷設されていた。

太平洋戦争末期、米軍が発電所を爆撃のターゲットリストに入れていた。

ウレプタアンナイ urep-ta-an-nay (互いに・沖・の方に・ある・沢)。

カマソウ kamaso (平岩・滝)。第二発電所前の平岩の滝。

チエセシケイ chiv-eseskei (水流・そこで・ふさがった・所)。岩があり、流木がひっかかり流れが止まったと伝えられる。第五発電所ダムの下流一〇〇<sup>メ</sup>あたりから千歳川の両岸が高く、川幅が狭くなる。

ピラポク pira-pok (崖・下)。第五発電所あたり。重要なイオロ(狩漁)の一つ。

トシリ tosir (流れが岸の下部をえぐって潜り込んでいる地形)。第五発電所下右岸。川幅が広く、悠々と流れている。

トプランケシ top-ranke-usi (ネマガリダケ・を降ろす・所)。三〇年前には、トシリ辺りにネマガリダケが群生していたが、枯死したという。

(以下は図6-5を参照)



図6-5 千歳川を下る〈1〉

ウコチシネエ uko-chisne-hi (互いに・中くぼみになっている・所)。紋別川が千歳川に接近して二つの川の間にある山の走り根を削って低くしている。山の鞍部。

トコタン tukotan (元のコタン)。一軒でもコタン(村)という(山田秀三)。

エカイニウシ ekay-ni-us (頭・折れた・木・たくさんある・所)。切り株が沢山あったところなのか。第三発電所への下り坂辺りにあったという。

ヤムニウシケペレペ yam-ni-us-keperpe (クリの・木・の群生する・浅瀬) 第三発電所の下流四〇〇メートルの左岸。

トナシウツカ tunas-utka (早・瀬)。

チエポモイ chep-moy (魚・の群がる・入江)。

#### 第二項 紋別川をのぼる

紋別川⑬ 原名モペツ mo-pet (静かな・川)。紋別川は急流であるが、千歳川への出口モペツトから三〇〇メートルは穏やかに流れている。

ペッチレウケイ peti-rewke (その川の・曲がっている・ところ) 紋別川がチャシコツの小山の裏に曲がっているところ。

チャシコツ chasikot (砦・跡)。千歳川と紋別川との間に挟まれて、紋別川の支脈の先端が独立した小山になっている。砦跡ではなく、山狩りに入山するとき、山上で祈った場所といわれる。

ウムウセ humsei (音のする・所)。紋別川をチャシコツ裏から上るとテシケマカ (滑り止め) という川床の岩が現れているところの名前という。急流。

ペスイ pe-suy (水・穴)。紋別川右岸に、ペンケ・パンケの二つのペスイ沢がある。

ケトイ ketoi (皮を乾かす枠・多い・所)。紋別川の支流。

### 第三項 千歳川を下る

ニナルプト ninar-putu (台地・の口)。紋別川から千歳川を下って北岸の地名らしいが、位置は不明。

イチャン ichan (サケ・マスの産卵穴)。

ポンフィラ (ナ) pon-puyra (小さな・激湍)。

ポロフィラ (ナ) poro-puyra (大きな・激湍)。

プイラポク puyra-pok (激湍・下)。

烏柵舞 うぐくまじ 原名はヲサクマコマナイ O-saku-mako-onaray (尻・無しの・後ろ・にある・沢)。『夕張日誌』はヲサクマナイと書く。ヲサクマナイに住む者が、何か理由があつて後ろの尻無川から移り住んだという伝聞がある。明治六年に「ユウナイ」、「ルウエン」、「フエラフ」、「ヲサクモマイ」の各村が合併して「ヲサクモマイ村」を設置し、漢字表記の烏柵舞村となる。

ソッキ so-ki (クマの巣)。「熊の寝床。神々の住む所、山中ではクマなど多くいる地帯。沖ではカジキマグロなど多くいる地帯」のホッケイ〈寝る所〉から変化したという(知里『地名アイヌ語小事典』)。千歳川の北岸。

第四発電所のダムが食い込んでいるユウナイ沢のかみ手。千歳川北岸にペンケ・パンケの二つのソッキ沢がある。

ユウナイ川⑮ iun-nay (それへび)のいる沢)。第四発電所ダムの北岸の深沢。

ウツカカ utka-ka (浅瀬・岸)。第四発電所付近。

シネチセ sine-chise (一軒・家)。知里真志保は今泉柴吉の話として、第四発電所より下流のところに、昔から一人の老人が住んでいて、冬でもど

こから取ってくるのか、青々としたギョウジャニンニクを食べていた。若者が分けて欲しいと頼むと、「おれは間もなくこの世からいなくなるのだからこれを食べてもいい。しかしこれはあの世に行ってもらってくるもので、お前たち若い者の食べるものではない」と(和人は舟を食う)。それでこの付近にオマンルバル(あの世へ行く道の入口)があることが分かったという。

sne-shise スネ・チセ(松明小屋)とは、そこへ泊まって松明を燃やして鮭をとる小屋。

シウトクンネヒ situ-kunne-hi (山の走り根・黒い・所)。situ は棍棒の意味もあるので、女が棍棒でうち殺された所という伝説がある。この山の走り根に二重の溝を持ったチャシコツ(砦跡)がある(長見義三)。

オセツコ o-se-tso (入口・広い・谷)。さけますふ化場の対岸の沢。昔はシコツ十六場所の一つ。

トイソウ toy-so (土・滝)。独立行政法人水産総合研究センター さけますセンター千歳事業所(旧水産庁北海道さけますふ化場)のあるところ。

所長室に昭和二年五月三十一日に描かれたと思われる N・M I M U R A のサイン入りの絵図があり、高さ一メートルの滝状のものが川を横断して存在する様が描かれている。これがその滝で、地質でいえば強結粘土層であるが侵食されて「崩れた・土の・滝」になる。現在は水没して確認できない。

マクンシリ mak-un-sir (後ろに・ある・山への川)トメ川⑲のこと。『夕張日誌』に「ルウエン、駿坂、人家三軒、…過ぎてマツクシリ、右川、ヲロツコチ、右川」とある。『増補千歳市史』には、「マツクチヒ女が・小便している・所」とあるが、武四郎の「マツクシリ」の語尾音と一致しないことから、榊原説では「マクンシリは、現在では千歳川支流のトメ川のこと」を指しているとあり、それを採録した。

ルウエン ru-wen (道・悪い)。さけますふ化場下流の第一烏柵舞橋手前  
 辺りの地名であったようだ。  
 又タツプ nutap (川の湾曲内の土地)。  
 エウコツチ e-ukotchi (頭・互にくっついている・所)。第一烏柵舞橋か  
 ら烏柵舞橋の間に中島がある。中島のかみ手で流れが分かれるが、その辺  
 りのこと(長見)。

(以下は図6-6を参照)

ウクルメム<sup>28</sup> ukur-men (タチギボウシ・泉池)。知里分類辞典による  
 とウクルは、ウクルキナ ukur-kina (タチギボウシ) の略称。湿地、草原  
 に生える紫色のユリ科「立擬宝珠」のこと。烏柵舞橋を渡って沢沿いに支  
 笏湖へ上がる道の辺りを指す。

マス mas (カモメ)。『増補千歳市史』では、「ハマナスの沢山ある所」と  
 訳しているが、「カモメ」の訳が妥当だと考える。

烏柵舞橋の下流で千歳川が左折するが、この辺りの右岸にウクルメム沢  
 の沢口があり、またすぐにマス沢の沢口がある。シコツ十六場所の一つで  
 あった。内別川やウクルメ川はサケの産卵床であったことから卵や「ホッ  
 チャレ」に群がるカモメに関係があるようだ。千歳サケのふるさと館菊池  
 基弘学芸員によると、現在は千歳川下流のインディアン水車でほとんどの  
 サケは捕獲され、上流に遡上することはないが、カモメ(マス)は夏から  
 冬にかけて時々、一羽、二羽がウグイやドジョウを餌にして、千歳川を低  
 空で飛ぶ姿を見かけるといふ。

ペサプト pesa-puto (シカのたうち回る入口、場所)。狩人はそこに仕  
 掛け弓をかける。

チャシコツ chasi-kot (砦・跡)。『夕張日誌』は千歳川に二つのチャシコ  
 ツをあげている。ペ(ベ)サ川<sup>29</sup>と紋別川河口である。ペサのチャシは南

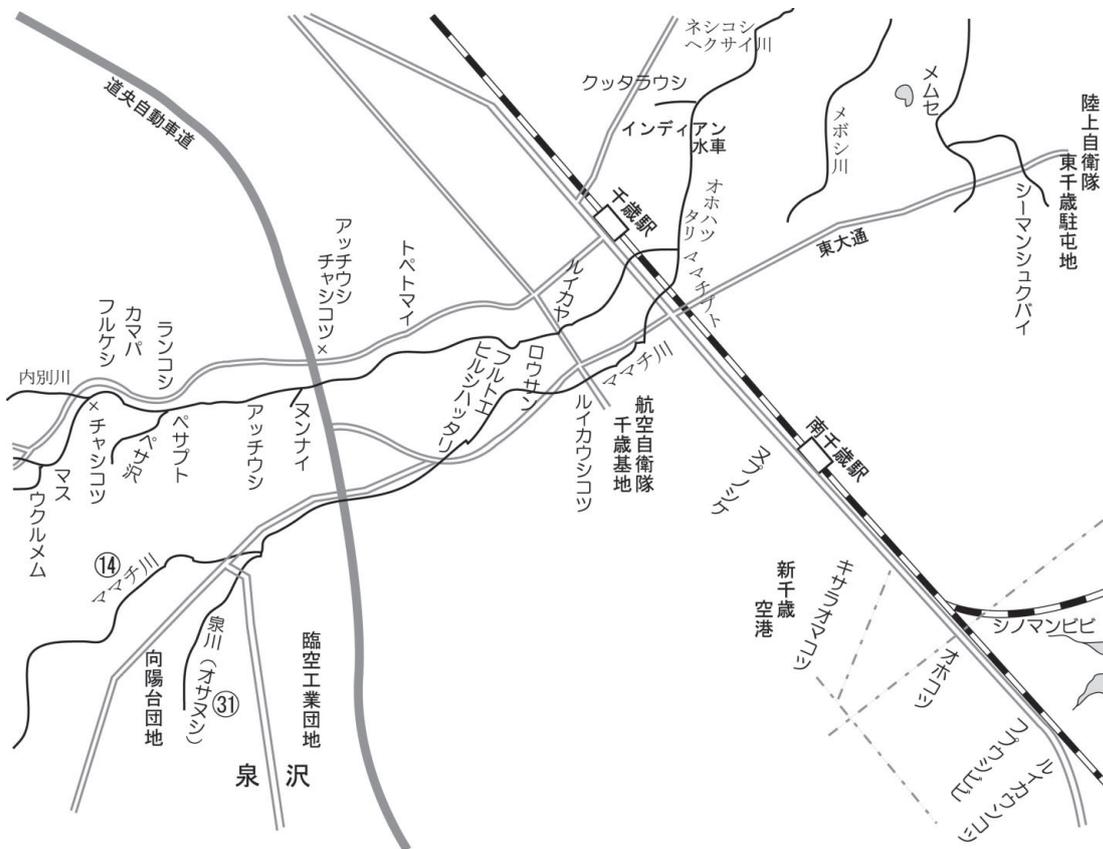


図6-6 千歳川を下る〈2〉

長沼用水取水口の背後の山上にある。

内別川(ナイベツ) ②④ 原名 *na-y-pu* (沢の・口)。この沢に固有名詞は無く、「ナイ」すなわち「沢」という一般名称で呼ばれている。支笏湖の伏流水が「ナイベツ湧水」として川の源となっている。環境庁の名水百選に指定されている。千歳市蘭越浄水場がある。

フルケシ *hur-kesi* (丘・の末端)。内別川側のすぐ千歳川下流。

カマパ *kama-pa* (平岩・のかみ)。蘭越生活館のある平地。根志越用水取水口がある。アイヌ語を語源とすると、以前に川床はカマ(平岩)であった。新屋という字名に変わった。

ハツタリパコツ *hattara-pakot* (淵・のかみ・谷)。ペサから千歳寄りの谷。淵はカマパに出るところにある。

アツチウシ *at-us* (オヒョウの皮・多くある・所)。高速道路橋のかみの千歳川曲流部分は、改修工事で直線になったが、このため新しく左岸となった土地。シコツ十六場所の「アツイシ」といったところ。

チャシコツ *chasi-kot* (砦・跡)。陸上自衛隊北千歳駐屯地用地の高速道路橋しもての丘端にあり、三重の溝をめぐらした擦文アイヌ文化期の遺跡。アツチウシのチャシコツと呼ばれている。

ランコウシ *ranko-usi* (カツラの木・多くある・所)。ランコシ(蘭越)と訛って呼ばれてきた。『夕張日誌』には、この「坂を越えてランコウシに至る」とあり、住家四戸あり、乙名(おつてな)ヌカルユウクが子福者で、一同十人を松浦武四郎に紹介した。土地区画整理で桂木となった。トペトマイ *tu-pet-oma-i* (二つの・川・のある・所)。中島のあるところを指す。現在林東公園(字大和)となつてるところ。

ヒルシハツタリ *pir-us-hattar* (渦・の多くある・淵)。市スポーツセンターしもての千歳川曲流部。「神社のカーブ」とも呼ばれた。

フルトエ *fu-etu-yi* (丘・そこで・切れた・所)。千歳神社の丘。

ロウサン *ru-o-san-i* (足跡・そこから・浜または川へ出る・ところ)。ルーサンと呼ばれた。元禄十三(一七〇〇)年の「元禄御国絵図」に「ろうさん」とある。シコツ十六場所随一の漁場であった。千歳神社の女坂となっている小沢の名でクマが出てきたところという。現在、石柱が立っている。

ルイカヤ *ruika-ya* (橋・岸)千歳橋北岸を特にそのように呼んだという。コタンがあった。

第四項 ママチ川をのぼる

ママツフト ③② *Mamachi-putu* (ママチ川・の口)。千歳川南岸にママチ川が注ぐ。

ママチ ⑭ *Mamachi* (ママツ)。古くは漁場名の「ママツ」と記されている。古名も意味は不詳。

ルイカウシコツ *ruika-us-kot* (橋・付いている・窪地)。コツは、シコツ・ポロコツ、オセコツと同じ窪地の意味。ママチ橋のかみてにあり、航空自衛隊千歳基地敷地から流れていた小沢。

泉川 ③① 原名オサヌシ *o-san-usi* (川尻に・出崎・付いている・もの(川)) または、(川へ出る・ことをいつもする・ところ)。クマがよく山から下りて来たところ。ママチ川上流の支流の名前。泉沢の古名とする説と、泉沢はマカウシ(開けた所)という説と、オサヌシは更に上流の支流名だとする説(明治二十九年五万分一地図)がある。

泉沢(元ママチ山林) 道央道(高速道路)の西側の地域名。かつて江別市の市有林で薪炭林であった約六四〇鈔を昭和四十五(一九七〇)年に千歳市が買収し、千歳市有林を含めた一帯を苫小牧大規模工業基地開発計画

団地として昭和五十三年度から開発・着工した。計画人口一万五〇〇〇人の泉沢向陽台団地の誕生である。現在は住宅団地に隣接して千歳臨空工業団地も開発されて拡張し、平成二十年現在約六五の企業が立地している。かつての山林が住宅地と工業団地に変貌した。

イクスイ(シリ) ママチ<sup>⑩</sup> ikesuy-namachi (腹を立てて去る・ママチ川)。氾濫して川筋が変わった可能性がある。現在の地図ではイクシリママチ川となっている。

幌延 原名ポロヌプ poro-nup (大きい野)。イクスイママチ川の水の流れない平らな沢。五万分の一地図には載っていない。

ポンママチ pon-namachi (子である・ママチ川)。イクスイママチ川の支流。

#### 第五項 千歳川下流の旧長都沼付近

根志越 nesko-usi (ネシコシ)。胡桃の木が群生する川の流域。

チャウス cha-usi (小柴・群生する。もの〈小川〉)。根志越橋下流二<sup>キ</sup>あたりで千歳川は右へ小川となり分流している。この分流の名前。ヤナギなどの柴がびっしり生えていて、丸木舟も通れなかったという。

チャイハッタラ chiray-tattar (イトウ魚・測)。チャウスの分流地点に深い湾曲部があり、イトウの釣り場であったといわれている。

ホンヘツ hon-pet (子の・川)。千歳川口(シコツペツト)近くで千歳川は左右に分流して長都沼に注いでいた。左への分流がポンヘツ。右への分流を「中の川」と称した。

#### 第四節 旧長都沼をめぐる

##### 第一項 旧長都沼をめぐる

旧長都 (おさつ) 沼 Osat-to (長都・沼 オサットウ)。シコツが千歳と改名された文化二(一八〇五)年前後の一時期、長都沼をシコツ沼と呼んだ幕吏らの旅行記が三点残されている。シコツ(千歳)川が流入するのでシコツ沼だと記しているが、長都沼をシコツ沼と認識した和人は、シコツ沼とはすなわち、シコツ川(千歳川)の源になる、もっと大きな支笏湖の存在を知らない場合に見受けられる例であった。それとも当時は、沼を一般的に「シコツ」、つまり窪地と呼ぶこともあったのであろうか。

長都川が注ぐから長都沼と呼ばれるようになったといわれる。文化四(一八〇七)年、田草川伝次郎が「ヲサツ蝦夷乙名の家」で、昼弁当を食べた(『西蝦夷地日記』)というように、ヲサツ川沿いにコタンがあった。

第十五号排水川(旧長都沼)<sup>⑤</sup> 水害地帯の長都沼付近一帯を灌漑排水し、耕地として食糧増産に供するため、昭和十六(一九四一)年に東京などの学生を編成した大学義勇軍が排水路を掘削した。実際には計画延長一二〇〇<sup>⑥</sup>のうち四〇〇<sup>⑦</sup>を掘削したが長都沼の水は流れ出さず、戦後昭和二十一年に三年計画で再掘削し、記念の大学橋も架けた。ポンプ船を投入した大改修が昭和三十九年に始まり、六十二(一九八七)年から七年間かけて幅一三〇<sup>⑧</sup>、長さ一九二〇<sup>⑨</sup>の水路に拡大し、水は千歳川に排水するよう整備した。かつてあった広大な長都沼は、石狩から太平洋に抜ける船運の要衝であったが、現在はすっかり灌漑されて畑地となり、ジャガイモなどが実っている。広幅排水路ともいう。水鳥の休憩地となっている。

長都A1幹線川<sup>④</sup>、同A2幹線川<sup>④</sup>、第十四号排水川<sup>④</sup> 同じく、これらの排水溝が旧長都沼であった一帯を縦横に流れている。

## 第二項 祝梅川をのぼる

祝梅川<sup>④⑤</sup> *sukup-pay* (成長する・イラクサ)。永田地名解は「成長した尋麻<sup>ちんま</sup>」とある。長見義三は「成長した」は、アイヌ語地名になじまないとするが、知里分類辞典にバイケイソウが *sikup-kinia* (成長する・草)、すなわち「春早く、すくすく伸びていく草」とあるの<sup>④</sup>、*sukup-hay-us-nay* (成長する・エゾイラクサの・群在する・川、スクフハイウツナイ)となる。

榊原文の踏査によると、旧祝梅川のエゾイラクサ (*hay* と *pay* は同義) は、他に比べて葉や茎が一回り大きいという。

ナムシユクハイ *nam-sukuphay* (冷たい・祝梅川)。湧水 (*nam nam*) は冷たいので湧水起源の川は、祝梅川右岸の短い支流の梅川<sup>④⑥</sup>と推定される。

メムシ川<sup>④⑦</sup> *mep-si* (泉池・の群在する・もの〈沢〉)。古地図にでてくるメプシがメボシ、メムセ、メムシと転訛しているのである。

アンカリト *an-kar-to* (鷺取小屋・作る・沼)。『夕張日誌』に「ヲサツトウ：南方にアンガリト 周二り位」とある。永田地名解は「アンガリト、鷺を捕る雪穴。アイヌ雪ヲ掘リテ穴ヲ作り其中ニ潜居シテ鷺ヲ捕ルソノ穴ヲ「アン」と云ひ」、作ることを「カラ」と言う。現在は消滅している。

チイカイ *chi-ikai* (われら・そこで・越える・所)。アンカリトに注いでいたという。永田地名解は「勢いを折りたる<sup>④</sup>ところ、曲がり所」とする。

ヌプノシケ *nup-noske* (野のまん中)。南千歳駅近くの旧千歳空港ターミナルの付近にあった浅い谷のことを指しているようだ。長見義三は、「さんなしの谷」(山梨はエゾノコリンゴのこと)と呼ぶ。

キサラオマコツ *kisara-omakot* (そのの耳<sup>④</sup>)では山崎のこと・に入る・谷)。旧室蘭街道では千歳から四<sup>④</sup>の地点。二〇〇年前の文化六(一

八〇九)年、勇払からビビ山道を歩き、千歳に到着した津軽藩士竹内甚左衛門は、キサラコツを通過する際に、「この辺林中、白砂にて道甚だよし」(『西蝦夷地旅行日記』)と書いている。白砂とは、元文四(一七三九)年の樽前山噴火により、積もった降下火山灰のこと。

## 第三項 旧長都沼付近

オルイカ川<sup>⑤</sup> *or-ruka* (*or-ruka*) 川口橋(ある・沢)。源は陸上自衛隊東千歳駐屯地に深く入る。明治二十九年陸地測量部地図ではイカベツ川に合流し、オサツトーに入っている(図6-7参照)。

旧馬追(まおい)沼 *maw-oi-to* (マオイ川の・沼 マオイト)。旧長都沼の北東に位置する長沼町には旧馬追沼がある。明治二十九年の地図では馬追沼の沼尻と長都沼はイカベツ川が紐帯のような役割を<sup>④</sup>してつながっていたようだ。現在は、マオイトも長都沼と同じく干拓されて、農耕地となっている。

キウス川<sup>⑤③</sup> *ki-us-i* (カヤ・の群生する・所)。

チプニ川<sup>⑤④</sup> *chip-ni* 榊原は次の①②③を検討している。チプ *chip* (丸木舟)に語源をもつならば、現在、この川は、幅二<sup>④</sup>、高さ一・五<sup>④</sup>の高さで小刻みに曲流する深さ一〇<sup>④</sup>内外となっており、少なくとも丸木舟が往来できる川ではない。しかし周囲が広葉樹の自生地であることから①大木から丸木舟を作るところ、②長都沼から丸木舟で来て、そこに丸木舟を置いて追分町方面に川伝いに越えたため、川口にはいつも丸木舟が置いてあった、ことに由来するか。③明治二十九年地図の「チプエ」に由来すれば、「チプエカリウシ」*chip-ekari-us-i* (丸木舟・そこで・回す・よくした・もの〈川〉)と、推測できる。

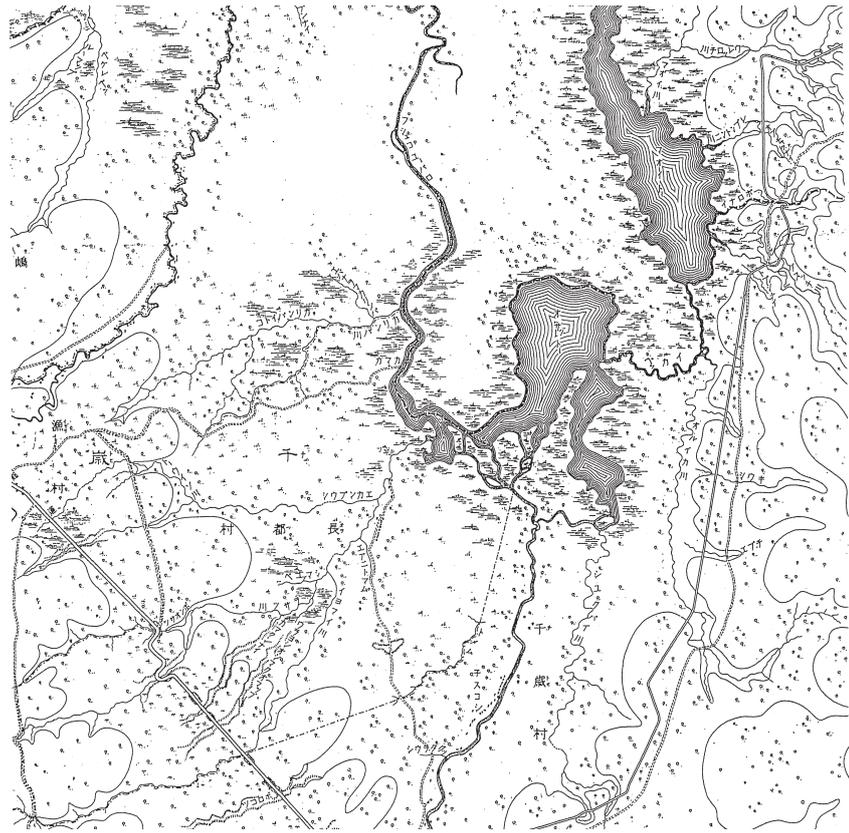


図6-7 明治29年長都沼・馬追沼(陸地測量部地形図)

第四項 ケヌフチ川をのぼる

ケヌフチ<sup>62</sup> *kene (us)-put kene* (血の木<sup>ハ</sup>ハンノキ。皮を煎じると赤い液がでるので、血の木とし、多量に出血のあった時に補血の意味で服用した(『分類アイヌ語辞典』)。ハンノキ・(群生)する河口。ケヌフチ川は馬追沼(マオイトー・昭和四十年代までは存在していた)に注ぐ。

東丘川<sup>63</sup> 原名はシーケヌフチ川「シー」とは「シツ」(本当の)を表す

との考えで、本来の嶮淵川のこと。本流の最上流のことを指す。上流の東丘川が嶮淵川の源とするならば、現在の千歳管内河川図の<sup>57</sup>シーケヌフチ川は、後の時代に名称が移転されてこのようになったようだ。

コムカラ<sup>58</sup> *kom-kar* (ドングリ・採取する)。*komu-kar-us-nay* (コムカラウシナイ。コムは粒を意味しドングリを指すことから、ドングリをよく採取した川)となるのであろう。ドングリが実るのはカシワ。コナラの木のことを千歳ではチカッポ(小鳥の)・ペロ(果実)・ニ、「小鳥の果実・の」といった(『分類アイヌ語辞典』)。ドスナラの実ではないかとの伝聞があるが、ドスナラはナラ材に比べて役に立たない木という意味からの俗名でハシドイのこと。モクセイ科のハシドイにドングリは実らないので、コムはカシワの実のことを指す。

タツウシナイ *tat-us-nay tat* 樺(カバ)の木がたくさんある沢の意味。幌加川<sup>59</sup> 原名ホロカケヌフチ *horka-keneput* (逆戻りする・ケヌフチ川)。川は逆戻りしないので、釣り針のように曲った形状の川を指す。

昭和二十六(一九五二)年の字名改正により、東千歳地域を代表する字名であったケヌフチ(剣淵)を泉郷に、コムカラ(近唐)を協和に、タツウシナイ(竜丑内)を新川に、シーケヌフチ(新剣淵)を東丘に変更した。

## 第五節 千歳川をめぐる (二)

長都川<sup>③④</sup> O-sat-nay (川尻・乾く・沢)。かつては広大な長都沼にそそいでいたが、国営かんがい事業により、長都沼が消滅して以降は、千歳川に流入している。

ポン長都川<sup>③⑤</sup> pon-Osat-nay (子である・長都川)。小さな長都川。

ユカンボシ川<sup>③⑦</sup> 原名は、i-kan-pe-us-i (イカンボシ・ウシ)、それ(ヒシの実)・採取する・もの(川)という説もあるが不詳。源泉は隣の恵庭市の恵庭公園の西端付近にある。ほぼ六<sup>キ</sup>ほど東に流れ、河川改修の結果、現在では市道南24号が長都川と交差するところで合流している。

『増補千歳市史』では、ユカンボシを「yuku-kan-pu-us-i. シカ・がたくさんいる・所」と説明し、同じ時期に刊行された『恵庭市史』(渡辺茂)でも、「yuku-aumpo-usi」「ユク」は鹿、「アン」はある、「ウシ」は「ところ」と訳し、鹿の住んでいたところの意味である、としている。しかし西田茂は、松浦武四郎の『丁巳第十五巻由発利日誌』は「イカンフレ」、『戊午』・『東西新道誌』は「イカンブシ」、間宮林蔵図では「井カンブシ」とあり、ユク(鹿)は古地図、旅行記等にも見当たらないことや、ユカンボシC15遺跡の発掘調査の結果を踏まえ、その報告書において、「ユカンボシ川」および「ユカンボシ」の地名は、本来的には「ペカンペウシ」すなわち「ヒシ(菱)の生育する・ある・ところ」の可能性を指摘している。古地図などの「イカンブウシ」、「エカンブウシ」が「ユカンボシ」に転訛したものであろう。ユカンボシ地名の初出は、大正九(一九二〇)年の陸地測量部五万分一地形図である。それ以前の明治二十九年五万分の一地形図は「イカンブシ」である。

釜加<sup>かまか</sup> kamaka (盤石の・上)。永田地名解では、カマ・カ・コタンとし

て、「磐上村、従来「アイヌ」部落ニシテ明治二十一年四家アリシガ、二十二年千歳村に移住セリ」とある。

西田茂によると、この盤石の正体は、『増補千歳市史』がいう「重粘土」ではなく、「恵庭a降下軽石層」という約一万八〇〇〇年前の恵庭岳噴火時の軽石層が、硬く厚い土層を成したものである。低地帯で緩慢な流れのため、この土層は流失せず、浸食されずに残っている。現在、長都川とユカンボシ川の合流地点に、「ユカンボシC1遺跡」があり、この付近に釜加の「カマ」土層に該当する「恵庭a降下軽石層」が露出しているので、容易に見ることができると推定される。

釜加の位置について、文化六(一八〇九)年、竹内甚左衛門は『西蝦夷地旅行日記』に、千歳川から下って長都沼を抜けるあたりの左の方に夷家があり、「ハマカと云ふ」と書いていることから、千歳川下流に向い西側にあったことを示している。現在の長都大橋の下流で千歳川の西(左岸)である。弁財天を祀った釜加神社(現・釜加七二番地の一一)は明治三十八年に建立された。

カリンバ川<sup>④⑥</sup> karimpa-us-i (エゾヤマザクラの木皮・群生する・もの(沢))。桜の木がたくさんあったことを意味する。カリンバ川は現在、直線の排水溝になっており、本来の流路とはかけ離れた位置になっているが、本来の千歳川との合流点は釜加の南20号川のやや下流付近にあったと推定される。

第六節 太平洋水系

(以下は図6-8を参照)

美々川<sup>66</sup> 美々川は千歳市内の火山灰台地の沢頭に源流を發し、南へ流れ苦小牧市域に入ると美沢川、ペンケナイ川、パンケナイ川を合し、ウトナイ湖に流入する。ウトナイ湖を経由した美々川は勇払川と合し、太平洋に注ぐ。

現在の美々川の源流は、左右に分かれた二つの湧水地である。武四郎が「シノマンヒヒ」と書く、ビビ川の「本当の源、奥に入った源」(シノマンビビ shino-oman-pipi)は、長見義三によると、千歳湖の奥の湧水地で、オホコツと呼ばれる谷としている。千歳湖は昭和二十年代に養魚場とするために湧水をせき止めてできた人工湖である。他の一つの源流の湧水地は、現在、養鶏場の南部にあたる沢の中にある。ヨシやアシが生い茂る沢底を蛇行しながら美々橋までを流れ来る。

美々 語源は不明という。永田方正は *pepet* (ペツ・ペツ川・川) と訳し、「支流多く、かつ曲流するにより名付けた。衆水とも訳すべし」とある。近世の記録にはビビ・ヒヒとある。*pepe* (水・水)、など水に関する原意であることは確かなようだ。

ペンケビビ *penke-bibi* (かみての・美々川)。ペンケビビ川は、御前水碑のところを西に入った美々川を指す。ペンケビビの上流部には美沢川(千歳市と苦小牧市の境界)が流れている。御前水碑とは、明治十四(一八八二)年、明治天皇行幸の際、千歳から美々へ向かう途中に休憩しお茶を入れた時の給水の記

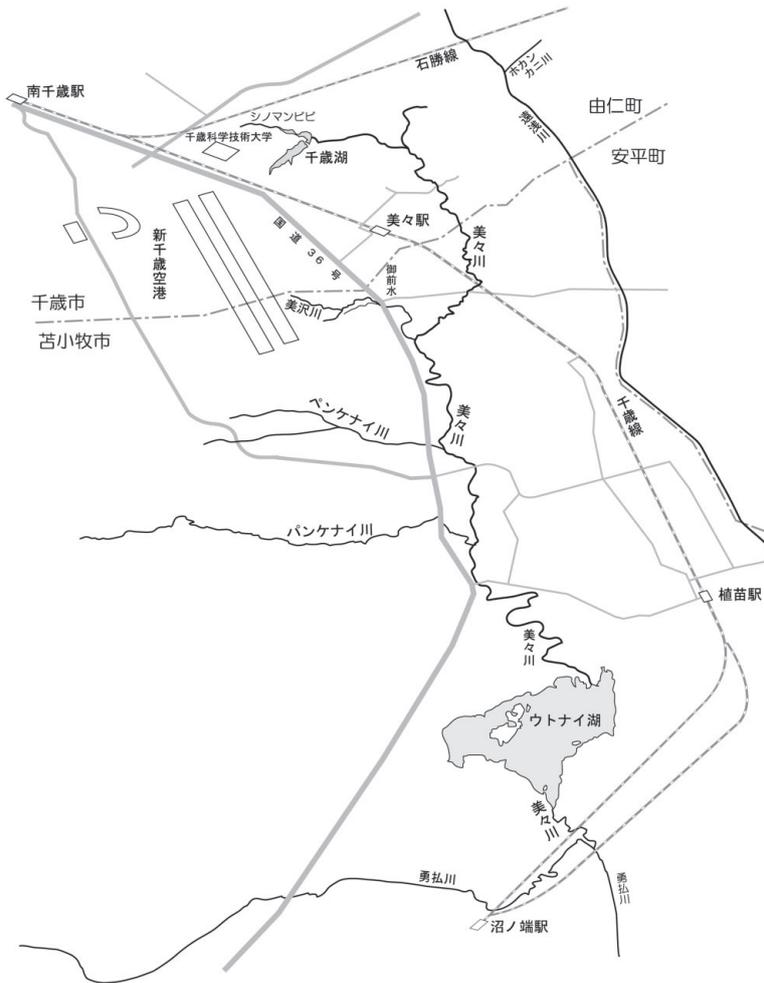


図6-8 太平洋水系

念碑のことである。

昭和五十一(一九七六)年から平成七(一九九五)年までの二〇年間にわたり、新空港建設のため道埋文が発掘調査したところ、松浦武四郎の『再航蝦夷日誌』のなか「ミミ憩所船乗場之図」に描かれた船着場や草葺屋根の小休所(作業所)跡のほかに、倒壊した状態で家(チセ)の柱や梁など建材群がそっくり出現した。太平洋に出かけたときに乗船したであろう板綴船や、メカジキを彫刻した櫂などの道具も発見されたことから、

ビビコタンの生活の様子が明瞭になった。

美沢川の流域縄文時代早期中頃(約七〇〇年前)に集落がつくられ、以来、擦文、アイヌ期まで絶えることなく人々の生活が営まれてきた。この地域は古くから人々の往来があり、ユウフツ越・千歳越えの太平洋・日本海を往来する交通要衝地であった。

ビベンコ *bibenko* (美々川・源流)。松浦武四郎は、札幌方面から千歳に着き、当時整地したばかりの新道を通って美々川筋に下った。その新道は現在の空港の敷地中央部を通り、国道の坂道(美々坂)近くで左右に分かれていた。山田秀三によると、右に行けば美々川の西股にあったビビに、左に行けば東股の方を渡って勇払に出ていた。『西蝦夷日誌』によれば、「追分(右ビビ、左ヒエボカリ)、標を立てたり。右に下ればビベンコ(またベンケビビとも云)。名儀、冷水の上に湧出る儀。此処に四尋も深き水の壺あり。(番屋あり、チトセ荷物此処より小舟に積なり)」と記す。ビベンコ(源流)は、美々坂付近にある湧水壺を設けたところという。

パンケビビ *panke-bibi* (しもての・美々川)。武四郎の『西蝦夷日誌』を参考になると、御前水碑から千歳湖を奥に入り、オホコツに至る美々川本流の名前を指す。長見義三は、なぜペンケビビ(かみて)に対してパンケビビ(しもて)と呼ばれたのか不明という。アイヌの人々にとっては、ビビ船着場のある飛行場側のパンケビビが重要であったのだろうか。ところが、明治二十九年地図には、パンケ(しもて)ビビに該当する箇所に「ペンケ(かみて)ベツ」と記してある。

ルイカウニコツ *ruika-un-kot* (橋・ある・谷)。千歳市環境センターの処分場があるあたりの谷か。

フプウシビゴ *hup-us-bi-go* (トドマツ・群生する・美々川)。千歳湖から奥の湧水地。JR千歳線と石勝線の分岐点近くで湧水している。現在の千

歳科学大学の裏手付近に当たる。

オホコツ *ohokot* (深い・谷)。旧室蘭街道で一番深い谷と解釈すると、明治二十九年地図では、美々貝塚あたりの谷になる。同地図上で千歳から旧室蘭街道を歩くと、谷が三カ所ある。キサラコツ、オホコツ、ルイカウニコツの順であろうか。

アウサリ川 *aw-sar (-un-ray)* 『ちとせ地名散歩』によると、内・(に入っている・そ)のヨシ原・川股の中にあるヨシ原の意、という。旧遠浅川の源流とホカンカニ、アウサリの二つの尻無川の間には広大な湿地帯があったが、そこを切り通して排水し耕地に変えて駒里という地名がついた。

ホカンカニ川<sup>68</sup> *po-kankan-ne-i* (子の・小腸・になっている・もの(沢))。長見によると、曲がりくねりの続いている流れをカンカンという。

「子の」と言うからには、「ポロ(親の)」というカンカニがあったと考えられるとしている。それはアウサリ川であったかもしれないという。

遠浅<sup>69</sup> *to-asam* (沼(の)奥)。アウサリ川とホカンカニ川を合して直線化された遠浅川は、早来町を流れ、苫小牧北東部で安平川に合流し、さらに河口付近で勇払川と合し太平洋に注ぐ。

#### 参考・引用文献

知里真志保『地名アイヌ語小辞典』楡書房 一九五六年／海保嶺夫「松前藩の成立」『蝦夷地のころ』(北海道開拓記念館常設展示解説書3) 一九九九年／「松前国蝦夷図」高倉新一郎編著『北海道古地図集成』一九八七年所収 一六八一年／作者不詳『蝦夷商賈聞書』函館市中央図書館蔵 一七三九年／北海道庁『新撰北海道史』第二巻通説一 一九三七年／同『新撰北海道史』第五巻史料一 一九三六年／山崎栄作『木村謙次集 上巻』一九八六年／松浦武四郎『夕張日誌 全』北海道立図書館マイクロフィルム／同『戊午東西蝦夷山川地理取調日誌』北海道出

- 版企画センター復刻版 一五五八年／武藤勘蔵『蝦夷日記』一七九八年／磯谷則吉『蝦夷道中記』一八〇一年／田草川伝次郎『西蝦夷地日記』中山利国編（昭和十九年・石原救龍堂）一八〇七年／竹内甚左衛門『西蝦夷地旅行日記』津軽家文書』所載、人間文化研究機構国立国文学研究資料館所蔵 一八〇九年／知里真志保「北海道駅名の起源」佐々木利和編『アイヌ語地名資料集成』所収 草風館
- 一九八八年／山田秀三『アイヌ語地名の研究3』草風館 一九七八年／知里真志保『和人は舟を食う』北海道出版企画センター復刻版 一九八六年／永田方正『北海道蝦夷語地名解』一八九一年／長見義三『ちとせ地名散歩』北海道新聞社 一九七六年／中川裕『アイヌ語千歳方言』草風館 一九九五年／榊原正文『データベースアイヌ語地名3 石狩Ⅱ』北海道出版企画センター 二〇〇二年／伊能忠敬『蝦夷国測量図』一八二一年頃／西田茂「ふたたび『ユカンボシ』の呼称について」『千歳市ユカンボシC15遺跡（3）』北埋調報第一四六集 二〇〇〇年／同
- 「こんなところに六三〇〇年前の集落があった」新千歳市史編さん機関誌『志古津』九号 二〇〇九年